

小学校は

エンピツの

匂い



東京学芸大学 附属

小金井小学校

同窓会

撫子の会

会報
12
号

● もくじ

1 Ⅱ 校長先生メッセージ

2 Ⅱ 進藤奈那子さんへのインタビュー

3 Ⅱ 第八回総会報告

4 Ⅱ さようなら追分の校舎

5 Ⅱ 集まりました

6 Ⅱ 寄稿五編

安全と危険を見極める

校長 飯田秀利

SARS（重症急性呼吸器症候群）がかつて世界を恐怖に落とし入れたことを覚えている方も多いと思います。二〇〇三年のことです。SARSウイルスに感染した人の致死率は高く、全年齢平均で十四〜十五%と推定されています。これほど恐ろしいウイルスがいる場所にわざわざ出向き、戦う人たちがいます。その一人が、本校の卒業生である進藤奈那子さんです。

進藤さんは、WHOのメディカル・オフィサーとして活躍中です。SARSに限らず、新型インフルエンザやエボラ出血熱などの伝染病の発生場所



に行き、生の情報を集め、診断基準や感染防御マニュアルを作成していらつしやいます。それらはWHOを通して世界中の人に利用されます。それだけに、進藤さんのお仕事は重要かつ責任が重いと言えます。

本校にとってうれしいことに、進藤さんがNHKの「課外授業ようこそ先輩」という番組の収録のため、四月に本校の六年生に授業をしてくださいました。収録は、極秘でしたが、NHKの番組予告のホームページを見ましたら、「大規模な天災や人災が起きた時、国連は何をするべきか」を考える授業をしてくださったようです。この内容は六月四日（土）に「めざせ、地球人！」という題で放送される予定です。とても楽しみです。

収録後に、小学生時代の最も印象に残っていることは何かを伺いました。進藤さんは迷わず、生活を送っていました。山の中で暮らした一字生活、ひたすら泳いだ至楽荘生活を微笑みながら懐かしそうに語ってくださいました。

ところで、進藤さんはどうして上記のような危険な場所に行けるのでしょうか。その理由は二つあるのではないかと思います。一つは、医師としての強い使命感、もう一つはどこまで安全でどこからが危険かの知識を持つていらつしやることだと思えます。世の中には、伝染病に限らず天災人災が多々あります。本校の子どもたちが、進藤さんのように安全と危険を冷静に見極めることができる人になってほしいと思います。



進藤奈邦子さん（昭和五十一年卒） へのインタビュー

野久尾悟（昭和五十一年小金井小卒）

二〇一一年四月二十六日実施

NHK「ようこそ先輩」を母校で収録後、吉祥寺にて同期で集まりました。附属中学校在学時の担任の三浦博先生も駆けつけてくださいました。

・インタビュー内容

Q…この二日間授業をしてみた感想は？

A…みんながやっていることは、世界と繋がっていることが多い。世界はすごく近い、ということが一番伝わった。授業の中で、アフリカで発生したウイルス感染症が世界中に広がっているのを防ぐというシミュレーションを行ってそれを実感してもらった。世界地図も普段自分たちが慣れた日本中心の地図ではなく、ヨーロッパとアフリカが中心にあるものを使って、「外から見た日本」も体験してもらった。今回、震災が起きて、日本国内と海外での情報量と危機感に大きな開きがあって、今住んでいるジュネーブには、そんなに大勢の日本人がいるわけではないけれど、町中の人たちから声をかけられ、心配された。世界の国々は、日本のことが好きで、日本を大切に思っている。日本のことをよく知らなくても日本製の商品の優秀さやおもしろさはよく知っていて、それがなくなってしまうので欲しいと思っている。これは、私たちにとってとても重要なことだと思う。Q…ご自身の時の六年生と今の六年生と比べて変わったところがありましたか？

A…私たちのころは、山猿の集まりみたい（「それは自分だろ」「あんただよ」とツッコミあり）

だったけれど、今の子供たちは、都会的で、洗練されていて。でも、すごく挨拶がキチンとしていることにはびっくり。話し始めると目が生き生きしてきて、発言もどんどんしてくるし、いいなと思った。

Q…小金井小学校で一番印象的な思い出は？

A…至楽荘で千m完泳して、浜でくず湯を飲んだこと。

Q…その思い出の鶴原湾に産廃施設建設の動きがありますか？

A…美しい自然は死守して欲しい。

・インタビュー後

NHK「プロフアッショナル」で撮影されていたお子さんとの交流の様子が話題になり、同期の女性同士で「どこの家も同じだね」「そうそう」と子育ての話で盛り上がりたり、昔話に花が咲いたり楽しい時間を過ごしました。

最後に、進藤さんから、「ねえ、みんなで校歌を歌おうよ」との提案があり、全員で「小学校校歌」「中学校校歌」「中学校校歌」斉唱。そして、

ついでに「甘樫の丘の歌」（中学校の修学旅行先の京都で歌った歌）も飛び出

しました。



撫子の会第八回総会、 および懇親会報告

副会長 佐々智樹（三十九年小金井小卒）



秋の晴天に恵まれ、撫子の会総会と懇親会が母校附属小学校二階食堂で約八十名の出席者と共に学校の校長先生、副校長先生などの来賓を迎えて和やかに開かれました。

総会の式次第は添付資料の通りつつがなく議事が執り行われ、新しい理事十二名と監事二名、更に会長、副会長二名が決定。また、収支決算報告と監

1. 理事

金子 修也	会長	(追 分 昭 25)
佐々 智樹	副会長	(小金井 昭 39)
川田 紀雄	副会長	(小金井 昭 41)
石塚 久		(豊 島 昭 30)
柴田 通彦		(豊 島 昭 35)
西山マサ子		(追 分 昭 32)
鈴木 弘		(小金井 昭 41)
菅沼 和江		(小金井 昭 42)
野久尾 悟		(小金井 昭 51)
保坂 健二		(小金井 昭 52)
吉川 勝		(小金井 昭 54)
楠本 維大		(小金井 昭 58)

2. 監事

神田 薫		(小金井 昭 46)
丸森 康平		(小金井 昭 51)

理事&役員名簿

査報告が承認されました。さらに、鵜原至楽荘近隣での産業廃棄物処理場建設計画に関する報告が野久尾理事から報告され、この問題に関しては撫子の会として小学校のみならず、豊島修練会、中学同窓会などとも連携して反対運動を大きな輪に広げていくことを確認しました。この問題への取り組みは逐次理事会の報告として、ホームページや会報でお伝えして行くことになりました。

総会は最後に撫子の会前会長である藤田暉夫氏に金子会長よりその長年に亘る同窓会への功績をたたえる感謝状を贈り、大きな拍手の中で終了しました。

その後、小学校に百周年を記念して同窓会から贈られたイチイの木を囲んで記念撮影を行い、その後の懇親会も豊島、追分、小金井三校の同窓生が一つになって楽しく親睦を深める大変有意義な一日となりました。

さようなら追分小学校校舎

藤田豊彦(昭和三十三年追分小卒)

私たちは昭和三十三年(一九五八年)追分小学校を卒業しましたが、昨年小学校校舎が取り壊されると聞き、当時の一組の方が校舎見学を計画され、平成二十二年十二月十一日、追分小学校校舎のお別れ会を兼ねて同期会を開きました。

私たちが入学した頃、校門は旧中山道側にあり、飛松校長先生をはじめ、一組は中村先生二組は向山先生という立派な先生に恵まれ、充実した六年間を過ごした記憶は今でも鮮明に残っております。

昨年十二月お別れ会で校舎を見学しましたが、校庭の大きな椎の木は暖かく私たちを迎えてくれ、皆が慣れ親しんだ音楽室、怖い思いをした人体模型のある理科の部屋、また組木細工の階段も当時のまま健在で驚きました。

そして夏大いに楽しみ、オリンピックの選手が泳いでくれたプールは今では少し小さく感じられ、感慨深く思いました。

追分小学校の校舎は無くなりますが、瞳に焼き付いた校舎の姿と、私たちを育てて下さった皆様への感謝の気持ちは、すばらしい思い出としていつまでも忘れないでしょう。



追分参観

矢数卿子(昭和三十五年追分小卒)

追分小学校卒業以来、五十年を数え、すっかり足が遠のいていた学び舎が改築に伴い解体されるという話を聞いたのは、二〇一〇年初秋でした。文京六中校舎改築の企画は以前から発表になっていたものの、ついぞ知らずに過ごしていました。建物は、昭和八年に東京市立追分尋常小学校と東京市本郷高等小学校の校舎として建設されたもので、私たちが登校していた当時は、文京六中との共有でした。追分小学校がなくなった後は、六中のみ校舎となっています。

生徒、学生時代通して、六年間同じ所へ通学した



平成 22 年 12 月 11 日 昭和 33 年卒業生

のは、東片町の校舎だけで、思い入れも一入で、校舎参観とクラス会のダブルヘッダを企画し、文京区、六中にご協力いただき、十一月二十八日に開催しました。土地の調査が着工され、子供時代のように、すべてを観ることは不可能でしたが、十分に思い出に浸ることができました。

まず、講堂がなくなっていたことに驚きましたが、他は、すべて当時のまま。入学して初めての教室、音楽室、図工室、理科室。洗面台や階段の手すりの低さに、今更驚いたりもしました。最後には、教壇に立ち、先生の目線で、子供たちが着席している様子を想像したり、あつという間に時間が経ってしまいました。

参観後は、所沢へ向かい、村上稔先生を囲みクラス会。長丁場でしたが、楽しいひと時を満喫した一日でした。



平成 23 年 2 月 19 日 昭和 29 年卒業生 屋上にて



平成 23 年 1 月 8 日 昭和 30・32 年卒業生 屋上にて



深海先生古希の会

内村 真理子（昭和四十六年小金井小卒）

昭和四十六年卒業の二組は、クラス替えのあった三年生から卒業まで深海龍夫先生に担任をしていただきました。

先生は着任当時まだ二十代の若さ。私たちはその最初の生徒です。授業、遊び、行事全てに先生とともに体当たりで取り組み和気あいあいとしたクラスの雰囲気はずっと変わらず、今も数年に一度のペースで集まっています。

そんな二組の直近のクラス会は昨年四月。先生の古希をお祝いする集まりとなりました。発起人はクラス内カップルT夫妻。急な呼びかけにも関わらず二十人あまりが先生の地元中野に集まりました。

先生はまだお仕事を続けられ、趣味のテニスに汗を流す生活とのこと。気力、体力の充実ぶりは目を見張るばかりです。

お祝いの会ということで心ばかりの記念品と寄せ書きも用意され、当日出席できなかったクラスメイトからも事前にたくさんメッセージが寄せられました。欠席者の「一言」を肴に昔話に花を咲かせ、先生がお持ちになった遠



足や教室での当時の写真を見て笑ったり赤面したりで、四十年前と今が交錯する独特の時間はあつという間に過ぎてしまいました。

共に小金井で学んだ私たちもそろって五十歳を超えました。仕事に家族の世話に、もう一踏ん張りの年齢であるとともに、いつでも心置きなく語り合える昔の仲間のありがたさに改めて気付くお年頃でもあります。深海先生を中心とした二組の会がますます発展し、末永く続くことを願ってやみません。

村山教育

小野重典（昭和十五年豊島小卒）

三年生から六年生まで担任して戴いたのは村山伊之助先生であるが、先生の教育はなかなか民主的で個性尊重の風があった。

「漢字帳」四年生になった時、毎日漢字を百字書いて提出することを課せられた。これは一年間程続けられて終わりとなったが、私はその後自主的に二年間続けたので先生から褒められた。しかし百字を毎日というのは結構大変で、今日は木偏の字、明日は人偏の字と云った具合で、今まで知らなかった漢字を沢山書いたものである。

「戦争日記」昭和十二年七月七日、支那事変勃発。そんな或る日、先生は皆に一頁二百字の日記帳を渡して、毎日なるべく支那事変のことを書くように云われた。私は軍国少年だったので、新聞などを見て事変の話を書き続けた。この日記の記載は、その内容はともかく作文の勉強には非常に役立ったのであるまいか。

「研究の時間」五年生になってからは毎週一時間「研究の時間」が設けられた。この時間には生徒か

ら話のテーマを出させ、先生がそれについて話するというものである。日露戦争、欧州大戦等、戦争物のほか、蒋介石、二・二六事件、「コミンテルン」などもあった。私は今になっても感心するのであるが、村山先生は非常によく物事を知っておられた。恐らく先生は日頃から図書館で調べたり、必要な資料収集等の努力をされていたのではないかと思う。

当時も所詮「教育ママ」がいて、「村山先生は野球ばかりして、ろくに勉強をしない。こんなことでは良い学校に入れません。」と声高に叫ぶママもいたようだ。しかし、先生の考えは「良く遊びよく学べ」で、ギューギュー勉強するより野球や自由研究等を通じて楽しい雰囲気醸成しながら、勉強意欲を持つように導いていくという教育方針だったのであると思われる。

向山嘉章先生を想う

石崎津義男（昭和十八年豊島小卒）

向山嘉章先生と高橋早苗先生は共に成田千里校長が豊島に呼ばれた方だった。

向山先生はスイスの教育家。ペスタロッチに私淑しておられた。先生は初め護国寺の傍の青柳小学校に赴任され、学習遅滞児の学級を組織して、長くその指導に努められた。

青柳小学校は街の学校であったから、商家の子どもが多かった。そこで先生は、児童に八百屋さんとか豆腐屋さんとか自分の商売を発表させた。そして、君たちのお父さん・お母さんの仕事は、世の中に必要なことをしているのだから、それを誇りに思わなくてはいけないといって、親を大切にすることを教えられた。

豊島に來られてからは、ぼくらを一年生から受け持たれた。

算術（算数）の時間では、問題を最後の一人が解けるまで懇切に指導された。そのため今でいうカリキュラムの消化は遅れた。しかし、先生は、二年生でも教え方で五年生の問題解けるのだといわれて、先を急がなかった。

鉄を渡すときは、刃のほうを持って渡しなさいとか、瓶に入った糊を使う時は周りから取って真ん中が山のように残るように使いなさいとか、日常茶飯事にわたる教えは数々あった。そして、授業で教えられたことは、その時間内に覚えてしまいなさいと強いわれた。夏休みは別として、通常、宿題は出さなかった。ぼくらは家に帰ったら伸び伸びと遊べて、楽しい毎日だった。

ぼくらが三年生を終えた時、先生は事情があつて豊島を去られた。

四年生からの担任は高橋早苗先生だった。

高橋先生も熱心だったが、一転して、勉強でも体育でも、専ら競争心を煽る指導だった。体罰はしばしばあった。その烈しい指導にぼくらが着いていけたのは、三年生までに培われた基礎学力、ゆえのことだった。

向山先生は昭和十六年から築地小学校校長をされ、戦後の昭和二十七年、定年退職された。

向山先生の業績については、東京府立豊島師範学校創立九十年記念「師範教育を想う」という本の中でも、この世代の典型的な人物―向山嘉章という一節を設けて特記されている。「この世代」とは、大正デモクラシーの世代のことである。

ぼくらは戦後の混乱期を経て卒業後三十年以上も経ってから、「向山先生って偉い先生だったんだあ」と語りあったのだった。

想いで

川上 高央（昭和二十一年豊島小卒）

この度、計らずも撫子の会総会に初めて出席する事になりました。

二〇一〇年九月九日に学芸大学附属小金井小学校 副校長の関田先生よりお手紙を頂き、思いがけず米国のコットンランディア博物館（ミシシッピ州）で十六人の豊島附属小の生徒（昭和十八年―三十一年卒）が描いた絵が発見され、その中にローマ字から判断すると私の絵らしきものがあつたということです。

先生から同時に今回の総会へのお誘いを頂いた次第です。私は昭和十五年に豊島小に入学し、昭和二十一年に卒業しました。その間、昭和十九年から二十年に掛けて約一年半を学童疎開で山形県上山町とその近郊の山寺で担任の須貝先生、寮母さん、級友たちと共に親許を離れて生活しました。戦時中の学校生活は今に比べればかなり厳しいものでしたが、須貝先生の厳しくも優しいご指導のお陰で無事に卒業することができました。

豊島での想い出は沢山あります。登校時に奉安殿の両陛下お写真に最敬礼をしてから登校する毎日、祝日には校長先生が奉読される教育勅語を朝礼の時に整列して拝聴すること、天皇陛下が行幸になる時には池袋駅東口の道路に整列して全員頭を下げたまま陛下がお車で通りすぎるまでそのまゝの姿勢を保たなければならなかった事、一字荘、至楽荘、成美荘での生活など色々と想い出されます。学童疎開生活は生まれて初めて親許を離れての生活でしたから自立心を養う上で大変役立ったと思います。

敗戦を知ったのは昭和二十年八月十五日に宿泊

先の本行寺から町に行く途中の道で、大人の人がその事を玉音放送で聞いたと私に告げてくれた時でした。急いで寺に戻り、須貝先生から陛下の放送の内容をお聴きしました。

正直、これで親に再び会えるという安ど感と敗戦の悔しさが同時に心に湧いてきたのを今更の様に想い出しています。

敗戦後の東京での生活は食糧難や仮住まいのバラックでの生活など今では考えられないものでした。今の平和で豊かな暮らししか知らない我が家の息子たちや孫たちには必ずしつかりと教えないければならないと思っています。

昭和二十四年四月十三日

濱田正一（昭和十六年豊島小入学）

「豊島の集団学童疎開資料集（七）学寮日誌編Ⅰ」の四月九日に（浜田東京へ）の一項があります。私の母が静岡へ疎開し、帰るようとの連絡があつたとかで、一人静岡へ行くことになりました。先生方のお手配のもと上野までは先生の奥様に連れていただき、豊島師範と立教大学の間にあつた親戚の家に着いたのが十日だったと思います。

当時は切符を手に入れるのは容易ではなく、一時落ち着いたのですが、私の誕生日の翌十三日空襲があつたのです。「今日はこの方面が危ない」とのこと。呼ばれて防空壕より出ると周囲は燃えていました。中学二年生の義兄が自転車にリヤカーを着けて曳き、その上に六年生の義姉と伴に乗せられて逃げ出したのですが、その時伯父が「豊島師範が燃え出した」と叫んでいました。

私は学校で教えられた通り目と耳をシッカリ押

えていたので見えません。自転車の前に焼夷弾が落ちた時には「もう、これまで」と思ったものです。中学二年生が二人の小学生をリヤカーに乗せ火の海の中を逃げのびる。今の子どもにできるでしょうか。私は高校の教師であつた間、ずっと生徒たちに「君はできるか」と問いかけてきました。

今回の大津波でもこのような美談があつたことと思います。

空襲が終わって帰った時には一面の焼け野原で附属の校舎のみが残っていたのを憶えています。

その後罹災者として切符を手に入れ、一人で空襲にあいつつ丸一日かけ静岡へ行きました。

残念ながら私は再び附属に戻ることはできませんでした。

附属豊島小学校の想い出

磯部 雄彦（昭和二十五年豊島小卒）

終戦直後、昭和二十一年春から池袋西口駅前の附属豊島小学校が再び開校し、疎開先や東京から離れて避難していた生徒達があちらこちらから戻って来ました。時代は東京大空襲の直後で、池袋の焼け野原の中に、附属小学校のコンクリートのビルだけが、残っておりまして。今でも思い出されるのは、西口の駅頭に立つと焼け残った立教大学の赤レンガの校舎がはつきりと見えた時代です。当時、私達は小学校三年生（担任桜福之助先生）でしたが、通学の交通事情も最悪で、小さな体で大人達に混じってがたがたの満員電車に乗り、押し潰されそうになりながら、或いは怪しげな「闇市」の中を通り抜けて、何とか通学を致しました。まだ社会全体が貧しく、食料事情も悪く、いつも腹ペコでしたが、学校

給食も始まり、アメリカの放出物資と云われた「脱脂粉乳」や、「コッペパン」の味気ない食事を毎日食べました。それでもお腹の空いた子供達の栄養価を満し、無事生き延びる事が出来ました。

世の中は終戦後間もない混乱の時代でしたが、幸い附属小学校の施設は他の学校に比べ大変恵まれておりました。当時としては立派な校舎とコンクリートの校庭、土のグラウンドが二面、25メートルのプール、更に附属施設として、東久留米の農園「成美荘」、鶴原の海の家「至楽荘」、箱根の山の家「一字荘」と数々の素晴らしい環境が残っており、楽しく学ぶ事が出来ました。その頃、世の中は厳しかったにも拘らず、生徒たちはお互いに肩を寄せ合っていて、奇妙に明るく、のびのびと育ち、平和になった時代を享受して居た様に思います。戦争中の厳しかった環境が、またたく間に忘れ去られ、別世界に変わったのかもしれない。

今でも当時の楽しかった思い出は忘れ難く、小学校を卒業して既に六十数年も経ちましたが、何年か前に当時の仲間が集まった時に、誰が言い出すともなく、もう一度思い出深い箱根の「一字荘」を訪ねたいと云う事になりました。今では廃墟になった跡地を訪ねました。草深い雑草の生えた入口の門柱の前で当時を思い出して、とても感動致しました。残念ながら、その附属豊島小学校はその後廃校になり、我々卒業生にとっては寂しい限りで、今日では文化施設として跡地を利用されておりますが、昔の姿は存在致しません。やがて時代と共に人々の記憶から忘れ去られてしまう運命にあるかと思うと残念でたまりません。

さて、話は変わりますが、私の小学校時代のクラスメイトに加藤雄三君と云う人物が居りましたの

で、紹介したいと思います。加藤君とは小学校で戦後の四年間を同じクラスで共に学びましたが、悠々とした大河の如き人物で、身体も大きかったのですが、スケールも大きな人物でもありました。後日になって知ったのですが、加藤君はかの有名な「加藤隼戦闘隊」の隊長さんの息子（三男）さんだそうですが、当時はまだ生々しい戦時中の記憶が残っていた時代にも拘らず、周囲の人達はその話題には一切触れず、ごく普通の友達として交流致しました。とても物静かで、落ち着いた、信頼の出来る仲間でした。

小学校を卒業後、加藤君は附属小金井中学に進学し、私は別の中学に進学致しましたが、高校（早稲田高等学院）に進学致しました折に、突然教室で加藤君から声を掛けられ、再び同じ学校で学ぶ事を知り、大変驚きました。更に、大学進学は、加藤君は早稲田大学政治経済学部、私は法学部にそれぞれ進みました。大学時代はお互いに多忙で、あまり一緒に行動した記憶はありませんが、四年生の秋頃でしたか、二人で学生デモに参加した事がありました。そろそろ安保デモ（六十年安保）の前哨戦が始まる頃で、政治的にはノンポリでしたが、一度デモの現場を見に行こうかと二人で相談して、日比谷公園にデモ隊として参加致しました。実際に現場に行ってみると、警察の機動隊に物凄い勢いで迫られ、恐怖を感じて二人で一目散に逃走致しました。そろそろ就職を意識する大切な時期なので、それが最後のデモ参加となりました。やがて二人とも無事大学を卒業し、共に社会に進出致しましたが、日本は丁度その頃、高度成長期の始まりで、無我夢中で働き、お互いに忙しい年代でもありましたし、また転勤等でのすれ違いもあって、その後の二十数年間はあまり交流がありませんでした。

四十代の後半だったと思いますが、突然、加藤

君から電話があり、「今度、私の会社（日産自動車）がアムステルダムに大規模なパーツセンターをつくる事になり、その担当を命じられました。ぜひ、磯部君の勤務している会社（キヤノン）のアムステルダムのパーツセンターに関して、参考になる話を聞かせて欲しいのですが？」との話でした。幸い社内のあるべき担当の人物が私の親しい友人でしたので、彼を紹介致しまして、それなりの役に立つたかと思えます。いよいよ彼の準備が整い、お別れに一席持つ事になりました。昔の仲間を一人加えて三人で一杯やりました。浅草の雑踏を冷やかしながら、向島でお酒を飲み、楽しく語らって、「元氣で行ってこいよ！」と送り出しました。その時、バーで上手にツイストを踊っている加藤君に、昔の彼からは想像も出来ない成長した姿を感じました。

その後、しばらく彼からの連絡はありませんでしたが、噂では「一生懸命頑張っている様だよ！」とか、風の便りで聞きました。私も多忙で忘れ掛けていた頃でしたが、ある日社内の欧州担当の友人から「加藤さんが、最近亡くなられた様ですよ！」と聞かされ、突然の出来事でまさかとは思いましたが、それが事実と判明し愕然と致しました。正直の所、驚いて言葉もありませんでした。出発に際して、あれほど元氣で明るく「それでは行って来ます！」と手を振って、笑って別れた彼が、既にこの世を去ってしまい、もう会えないのかと思うと誠に寂しい限りです。

その後、聞く所によると、当時、現地で無事にパーツセンターを立ち上げ、彼の事なので相当頑張った事と思いますが、パーツセンターが活動を開始し始めたある日の朝、奥さんが子供さんを車で学校に送って帰宅すると、ベッドの中で既に亡くなって居た彼を発見したそうです。奥さんもさぞ驚かれた事と思いますが、原因は心臓病との事でした。彼にそ

んな持病があったとは聞いておりませんので、恐らく相当無理をしたのではないかと思います。日本の新聞にも「企業戦士の壮絶な死!」と書かれていた様ですが、彼の戦場で亡くなられた父君と同じように、彼の死もある意味では「現代の戦場」とも言えるビジネス社会での悲しい出来事で、あまりに若くしてこの世を去りましたので、さぞ無念だったと同情を禁じえません。

もし、彼がその後も長生きしてましたら、世界中を飛び回って活躍し、一流の人物として世の中で高い評価を受けたに違いないと、誠に残念に思います。現在でも、附属豊島小学校で共に学んだ仲間として、我々同級生の心の中に加藤君は生きており、これからも彼の事を忘れる事はないでしょう。私もいずれ天国へ行った折には、彼からゆつくりアムステルダムでの活躍の話を聞かせてもらいたいと思っています。



同窓会ホームページ編集委員からのお知らせ。

<http://www.nadeshikonokai.jp/index.html>

ホームページ委員 佐々・保坂

同窓会の動きをいち早く皆様にお知らせ出来るのはホームページです。鶴原産業廃棄物処理施設建設問題などの現状を詳細な情報と共にアップデートでお知らせ出来るほか、各学年、各クラス単位での情報交換を我々のホームページを通して行うことが出来れば、同窓生相互の親睦に便利なツールとなることは言うまでもありません。しかし、その機能を一層充実させていかな

ければならない撫子の会ホームページです。同窓会員の中でホームページ運営と企画・編集・書き込み・デザインなどをお手伝いしてくれる方々を募集しています。ホームページ作成に関して興味と後経験ををお持ちの方、どうぞご連絡下さい。ホームページ編集委員としての活躍を期待しています。ご興味をお持ちの方は nadeshiko@nadeshikonokai.jp にご連絡を頂ければ幸いです。ホームページ制作を通して同窓会活動に参加出来る良い機会です。皆さまの参加をお待ちしています。

今回は四千名に郵送

副会長 川田紀雄

読んで下さっている皆さんのお手元には無事会報が届いたようですね。この辺りのお話を少しだけ。

明治四十五年から始まる本同窓会には一万五千を超す卒業生の記録がありますが、更新できずに不明のものもたくさん混ざっています。私たちは経費の関係もあって会報を毎回二千通お送りし、届いた方だけを郵送リストに残す、という方法を八年程続けて来ました。おかげさまでほぼ二千人の方にはきちっと届くようになりましたので、今回は宛先を増やしました。

さて、現在も会費制は取らずに新六年生からの入会金だけで活動しています。若い方にはちょっと申し訳ない感じ。ということで、先輩諸氏（ほとんど全員です）毎回で申し訳ないのですが、払込用紙を通じてのカンパをよろしく願います。もちろん強制ではありませんよ。

届かない方は正しい住所情報がこちらにない、と思われま。皆さんの同窓生の「私にも会報を送って。」という情報もたくさん下さいね。どうぞご遠慮なく。

編集後記

編集担当 西山マサ子

この号十二号の会報は秋に発行の予定でしたが、鶴原の産業廃棄物最終処理場建設の問題が持ち上がり、急遽六月の発行になりました。鶴原の問題は別冊に詳しく記されています。ご覧ください。

卒業生の進藤奈那子がNHKの「課外授業ようこそ先

輩」という番組で本校の六年生に授業をして下さることを聞き取材しました。授業は極秘に行われ六月四日に放映されました。

昭和八年に建てられました追分小学校（現文京区立第六中学校）の校舎が取り壊される事を聞き、かなりの卒業生が訪れ別れを惜しましました。

小学生時代を思い出し次世代にも伝えたい内容を五編、寄稿して頂きました。

お詫び

十一号で榎本隆治先生のことを書き頂きましたが、写真が記載漏れになりました。誠に申し訳ございません。ここに記載させて頂きます。

寄稿のお願い

会報の紙面をより気楽に幅広い年次の方々に楽しくお読み頂くために年間を通して、いつでも寄稿を受けることにします。同期会・クラス会・同窓の仲間の集まりなど、写真に説明を添えてお寄せ下さい。お待ちしております。



昭和28年追分小卒 高尾山にて

「撫子の会」会報・第十二号

発行 平成二十三年六月

この号の編集担当

金子修也

西山マサ子

野久尾悟

印刷 山信印刷（山佐和雄）

投稿・寄稿 問い合わせ先

川田紀雄 電話（042-324-9912）

西山マサ子 電話（03-3815-9619）

masako@zaw.att.ne.jp

野久尾悟 電話（03-3720-8023）

同窓会事務局 東京学芸大学附属小金井小学校内

住所 〒184-8601 小金井市貫井北町四丁目一番一号

電話 042-324-9912 Fax 042-329-7826

撫子の会郵便振替口座

番号 00100-8-709121 加入者名：撫子の会